サッカーにおけるゴールキーパーのクロスボールに対する戦術構造

—— ゴールにとどまるプレーについて ——

檜　山　　康

The tactics structure toward cross balls of the goalkeeper in soccer

—— About the play that stay to the goal ——

HIYAMA Yasushi

1．はじめに

クロスボールに対して，ゴールキーパー(以下ＧＫとする)が直接ボールを処理するプレー行動についての技術・戦術的な構造については別稿[3)4)5)6)7)]において述べてきた。しかし，ゲーム中，全てのクロスボールに対してＧＫが処理をするわけではない。フィールドプレーヤーが直接ボールに対してプレーし，クリアなどのプレー行動をとる機会のほうが多い。そのため，ゲーム中のクロスボールがあげられる多くの状況において，ＧＫは，フィールドプレーヤーに処理させながら，ゴールにとどまりながら対処していくというプレー行動をとることになる。このようなプレー行動は，クロスボールからの得点の多さ[1)8)]，ゲーム中の機会の多さだけでなく，相手の２次攻撃への対処という意味においても非常に重要である。クロスボールのクリアは不充分になることが多く，引き続き相手の攻撃を受けることは多い[11)]。そのためＧＫがポジションを修正しながら，コーチングなどによって守備組織を立て直し，適切にクロスボールに対して対処していくというプレー行動が要求される。しかし，ボールに対するこうした間接的なプレー行動の構造は，明確になっていない。したがって本稿では，クロスボールに対して，ＧＫがゴールにとどまる選択をした場合のプレー構造について明確に示すことを目的とする。

2．ＧＫがゴールにとどまる場合のプレー行動について

クロスボールに対してＧＫがゴールにとどまるという判断をした場合，その後のプレー行動は，(1)ポジションの修正，(2)ディフェンダーへの指示(コーチング)が考えられる[10)]。ゲー

ム中のディフェンダーへの一般的な指示は別稿[4]において述べているので，ここでは特に，クリア後にディフェンダーをどのように動かすかという具体的な方策，指示の方法について考えることにする。

(1) ポジションの修正

ポジションの修正は，ゲーム中の様々な要因の影響を受ける。ＧＫは微妙な影響を瞬時に判断し，ポジションを修正しなければならない。そのため全ての事例をあげることは困難なため，ここでは単純化したモデルを提示し原則を抽出する。

ポジションの修正で最も考慮しなければならない点は，どこでシュートが打たれるかである。そのため，クロスボールが配球され，他のプレーヤーがボールに触れる地域を４つに分類し，それぞれの地域からのシュートに対するポジションの修正について述べることにした。ゴールの中心からボールサイドをニアサイドと考え，さらにニアポストからボールサイドを「ニアサイド・フロント」とし，ゴールの中心とニアポストの間を「ニアサイド・バック」とした。またゴールの中心からボールサイドと遠いサイドをフォアサイドと考え，フォアポストとゴールの中心の間を「フォアサイド・フロント」，フォアポストよりも遠いサイドを「フォアサイド・バック」とした（図１）。

① ニアサイド・フロントへのクロスボールに対するポジションの修正（図２）

スターティングポジションからボールとゴールの中心を結んだ線上よりややニアサイドを意識して修正する(図２ａ)。ニアサイドを意識する理由は，この位置からのシュートは，ゴールまでの距離がニアサイドの方が近いからである。距離が近いということは反応できる時間も少ないため，ニアサイドに注意してポジションを修正する。誤りとしては，正確なポジションをとる前にボールに向かって前進してしまうことがあげられる。このような例は，特にフォアサイドから移動してくる際に生じる。この移動では角度を狭めるという点では誤りではないが，シュートの瞬間にコースに入れないことが多くなるため，ニアサイドをカバーできなくなる。また前進しているため頭上も抜かれ易くなるであろう(図２ｂ)。よって角度を狭めることは，ＧＫの重要なプレーの一つであるが，むやみに前進せず，まず正確なポジションをとることによってシュートコースに入ることが優先される。

ポジショニングの修正にはシューターのゴールやボールに対する助走角度も参考になる。例えば図２ｃ①のようにボールに向かうように助走した場合，ニアサイドへのシュートは容易であるが，フォアサイドに対しては難しい。ヘディングシュートでは体を捻りながらヘディングをしなければならない。そのためＧＫのポジションはニアサイドに重点を置いたものになる。図２ｃ②のような助走では，ゴールの全ての方向にシュートが容易であるため，ＧＫのポジションは距離的に近いニアサイドを意識しながらも，フォアサイドへのシュートにも充分対応できる準備が必要である。

② ニアサイド・バックへのクロスボールに対するポジションの修正（図３）

スターティングポジションからボールとゴールの中心を結んだ線上にポジションを修正する（図３ａ）。

この場合，ニアサイドとフォアサイドでのボールとゴールの距離に大きな違いはない。ゴールに対する角度も両サイドに開けている。そのため，どのサイドにシュートを打つことも容易である。よってポジションはどのコースへのシュートにも対応できる中心線上に修正されるべきなのである。

この状況では，ボールを追うように前進してしまうと頭上を簡単に抜かれてしまう（図３ｂ）。よってゴールラインから離れずにポジションの移動を行う。

シューターの助走角度については，図３ｃ①のようにボールに向かうように助走した場合，フォアサイドへのシュートがやや困難であるだけで，シュートコースに差はないと考えられる。そのためＧＫのポジションは助走角度に影響をあまり受けない。

③ フォアサイド・フロントへのクロスボールに対するポジションの修正（図４）

ニアサイド・バックと同様スターティングポジションからボールとゴールの中心を結んだ線上にポジションを修正する（図４ａ）。注意点もニアサイド・バックにおける注意と同様，ボールを追ってしまって前進し過ぎないことである（図４ｂ）。

シューターの助走角度については，図４ｃ①のようにボールに向かうように助走した場合と図４ｃ②のような助走の間にシュートコースの難易度の差はない。そのためＧＫのポジションは助走角度に大きな影響を受けないと考えられる。

④ フォアサイド・バックへのクロスボールに対するポジションの修正（図５）

スターティングポジションから，ボールとゴールの中心を結んだ線上よりニアサイドを意識して修正する（図５ａ）。ここでも正確なポジションをとる前に，ボールに向かって前進し過ぎないようにする（図５ｂ）。またフォアポストより外側までボールを追い過ぎないように注意する。

シューターと助走角度の関係は，例えば図５ｃ①のようにボールに向かうように助走した場合，両サイドへのシュートが容易である。そのためニアサイドを意識しながらも，フォアサイドへのあらゆるシュートにも対応できるように準備しておくことが必要である。図５ｃ②のようなボールを追うような助走では，ボールから見てニアサイドのシュートは可能だが，フォアサイドへの折り返すような強いシュートは難しくなる。よってＧＫのポジションはニアサイドに重点を置きながら，フォアサイドへの頭上を越えるようなシュートに対応できるようにしておく。そのためにはスタンスをボールに正対するのではなく，ステップバックできるようにゴールラインと平行にしておくことが１つのポイントである。

(2) ディフェンダーへのコーチング

ＧＫがゴールにとどまると判断した場合，直接的なプレー行動としてはポジションの修正があげられた。しかしＧＫのプレー行動はそれで終了するわけではない。ポジションを修正しながら，ボールを処理するプレーヤーに的確な指示を送らなければならない。その内容は主に①クリア，②クリア後のディフェンダーのプレー行動，に関することである。ここではコーチングする際の理論的背景について述べることにする。

① クリア

クリアに関しては「誰が」「どこへ」クリアするかといった内容が明確に伝達されなければならない。どこへという点に関しては，原則的には優先順位順に「高く」，「遠く」，「ワイド」というクリアが理想である[8)9)]。つまりそれぞれの要素は，時間，距離，角度を守備側に有利なものにするからである。こうした条件を満たしたクリアをディフェンダーにさせるため，状況に応じてディフェンダーがクリアすべき方向を的確にコーチングしなければならない。

ディフェンダーがクリアすべき方向は，ボールをコンタクトする地域によって決まってくる(図６)。もちろんボールの質やディフェンダーの体勢，相手プレーヤーのプレッシャーなど様々な影響を受けるのであるが，ここではプレーヤーがボールに触れた地域によってどこへクリアすべきかを考えることにする。

ニアサイドへのクロスボールは，ボールの方向に単純に跳ね返すことが最も容易で効果がある。なぜならこの方法では，ボールの反発力を十分に利用でき，距離を稼ぐことができるからである。またゴールに対する角度も狭くなり，相手に拾われたとしても直接的にゴールを狙われる可能性は少なくなる。またクリアに使われるヘディングやボレーキックの技術にしても体をボールの方向に向けて正確に当てさえすればよいので容易である。助走もボールに対して前進できるためジャンプの高さも確保しやすくなる(図６ａ)。

ゴール中央付近のクロスボールは，そのボールをディフェンダーがどのような状況でクリアするかによってクリアすべき方向が決まってくる。つまりボールを前進しながらとらえれば，クリアの方向はボールの方向になり，後退しながらとらえればボールが飛んできた方向とは逆の方向になる(図６ｂ)。後退しながらボールをとらえる場合，ボールの方向にクリアしようとすると距離が出せない。そのためボールのスピードを殺さずに方向を変えるように逆サイドにクリアするのである。

フォアサイドへのクロスボールに対しては，すべて逆サイドにクリアすることが理想である(図６ｃ)。ゴールに対する角度を稼ぐためには，ボールの方向にクリアしていたのでは，相当の距離を出さなければならないからである。逆サイドであれば，それほど距離が出なくともゴールに対する角度は狭まり，直接的なシュートの危険は回避できる。

このように理想のクリアの原則，方向はあるが，実際のゲームではこうした原則を忠実に実行することは困難である。なぜならゲームでは，相手プレーヤーのプレッシャー

や変化するボールの質，さらにはクリアする際の自身の不安定な姿勢などがクリアをより困難なものにするからである。現実にペナルティエリア内でのクロスボールのクリアの内，60～70%がゴール中央のペナルティアーク付近に落ちることも報告されている[2)]（図６ｄ）。様々な要因によって結局，危険な地域にクリアせざるを得ないのが現実なのである。そのためＧＫとしては，ディフェンダーのクリアがそうした地域に落ちることを想定し，クリア後の対処をディフェンダーに指示できるよう準備しておくことも必要であろう。

② クリア後のディフェンダーのプレー行動

クリア後のディフェンダーのプレー行動は，クリアボールが相手に拾われるか，または味方が拾うかによって変わってくる。そのためここでは，ＧＫのコーチングの背景となる理想的なディフェンダーのプレー行動について，クリアボールを相手が拾う状況と味方が拾う状況の２つの状況について考えることにする。

ａ）相手に拾われた状況でのディフェンダーのプレー行動

クリアが相手に拾われた状況では，まずボールを持っている相手プレーヤーにプレッシャーをかけることが重要である。ボールにプレッシャーがなければ相手の攻撃を自由にしてしまい，簡単に２次攻撃を受けることになってしまう。２次攻撃からの失点は多い[11)]。よってボールにプレッシャーをかけ，相手の攻撃方向を限定し，ゴールへの直接的な攻撃を止めなければならないのである。ボール対するプレッシャーのかけ方は，クリアボールが空中にある間や相手プレーヤーがボールコントロールしている間にボールに最も近いプレーヤーが間合いをつめ，プレッシャーをかけることが理想である（図７）。

ボールにプレッシャーがかかったら，ディフェンダーにマークを確認させる。クリアまではマークをしているが，クリア後にマークをフリーにしてしまうケースが見られる（図８）。２次攻撃が効果的なのは，こうしたことも理由の一つである。そのためプレーを切ることなく，継続してマークを確認させなければならない。

次にマークを確認させながら全体の動きとしてラインを押し上げる。このプレーの目的は，ボールにプレッシャーをかけているプレーヤーのカバーリングをするとともに空いたスペースを消し，相手の攻撃をさらに限定することである。またボールを奪った時点で，素早く攻撃に転じるためのよいポジションをとって準備することも含んでいる（図９ａ）。しかしラインを有効に押し上げるには，全体の意思統一及びボールとラインの距離が問題である。全体の意思統一がなければ，フリーな相手プレーヤーがオフサイドにかかることなくゴール前でボールを待つことができるであろう（図９ｂ）。またボールとの距離が近すぎてしまうとドリブルなどで簡単に突破される危険がある（図９ｃ）。よってラインを上げるには，ＧＫからの明確なコーチングが不可欠である。そのためＧＫはプレーの考えられる一連の流れ（ボールに対するプレッシャー～マー

クの確認～押し上げ）を理解し，言葉にしておく必要がある。

b）味方が拾った状況でのディフェンダーのプレー行動

クリアを味方が拾った状況では，まずボールを持っているプレーヤーをサポートすることが必要である。ボールが落下する地点付近は相手プレーヤーもボールを拾おうとして密集していることが多い。そのためボールを確保しても相手のプレッシャーをすぐに受けてしまい，ボールを奪われてしまう可能性が高い。よって状況を打開するために，味方がクリアを拾ったなら周りのプレーヤーが素早く反応し，パスコースを確保しなければならないのである（図10）。

パスコースを確保し，攻撃に移れるようであればラインを押し上げる。ラインを押し上げる目的は，攻撃のサポート，そしてボールを奪われた場合，すぐに守備に入れるようなポジションをとっておくことにある。押し上げがなければボールを奪われてしまっても次の守備ができず，相手に自由な攻撃を許してしまう（図11 a）。ここでも全体の意思統一とボールとライン間の距離を考えて押し上げることは言うまでもない。ボールとの距離が近すぎてしまえば，ボールを奪われた場合，簡単に背後をとられてしまうであろう（図11 b）。

このように味方がクリアを拾った場合の一連の流れ（サポート～押し上げ）を理解し，言葉にしておければ的確なコーチングは可能であろう。

3．まとめ

ＧＫが守備行動をとるということは，ボールに対する直接的なプレーだけとは限らない。ゲーム中においてはフィールドプレーヤー同様，ボールコンタクトを伴わない「ボールなしのプレー」が時間的に大きな割合を占める。そこで本稿ではＧＫのクロスボールに対する間接的なプレー行動，すなわちゴールにとどまるプレーについて検討してきた。クロスボールに対する間接的なプレー行動は，大別すると以下のような内容になると考えられる。

(1) ポジションの修正

- ニアサイドへのクロスボールに対しては，ゴールの中心からニアサイドを意識してポジションを修正する。
- フォアサイドへのクロスボールに対しては，シュートが打たれる地点から見てニアサイドを意識してポジションを修正する。
- 中央付近のクロスボールに対しては，ゴールとボールを結んだ線上を意識してポジションを修正する。
- クロスボールを追って，前進し過ぎないように注意する。
- シュートを行なう相手のボールに対する助走角度もポジショニングに影響を与える。一

般的にゴール方向に向かっていく助走は，シュートを行ないやすいが，ゴール方向から離れる助走はシュートが難しく，シュートコースを限定しやすい。

(2) ディフェンダーへの指示（コーチング）

- ニアサイドへのクロスは同サイドに，フォアサイドへのクロスは逆サイドにクリアさせるようにコーチングする。また中央へのクロスに対しては，ディフェンダーがボールに対して前進しながらクリアできるような状況であれば同サイドへ，後退しながらであれば逆サイドにクリアさせる。
- クリアしたボールが相手チームのボールになった場合，ボールに最も近いプレーヤーにプレッシャーをかけさせ，同時に他のプレーヤーに対してマークを確認させる。そしてこれらのことが充分であれば，全体のプレーヤーを押し上げるようにコーチングする。
- クリアしたボールが自チームのボールになった場合，ボールを持ったプレーヤーをサポートしパスコースを確保しながら，全体を押し上げるようにコーチングする。

このようにクロスボールに対するＧＫの間接的なプレー行動についてポジションの修正とコーチングという観点から明確にしたが，今後はＧＫの間接的な守備行動について全体的な戦術構造を構築していく必要があろう。

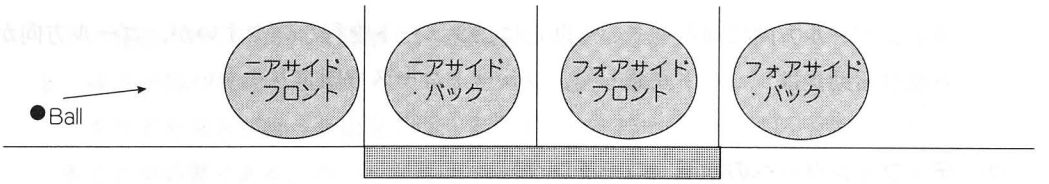


図1　クロスボールが配球される地域の分類

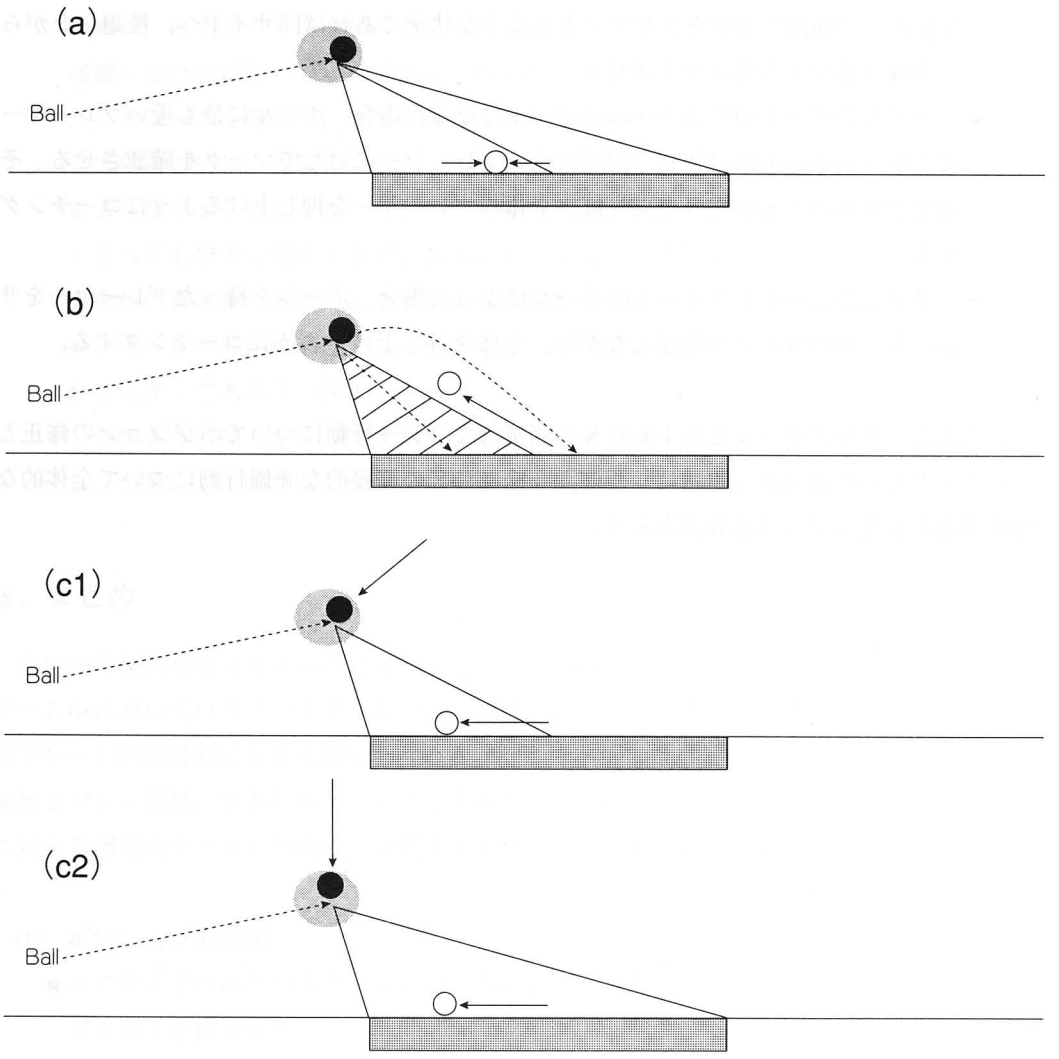


図2　ニアサイド・フロントへのクロスボールに対するポジションの修正
（a）ボールとゴールの中心を結ぶ線上よりややニアサイドを意識してポジションを修正する
（b）ポジションをとらずに前進してしまった例
　・ニアサイド（斜線部）を狙ったボールに対して守備が難しくなる
　・頭上を抜かれ易くなる
（c）c１：この助走の場合，容易なシュートの方向はニアサイドである．そのためニアサイドポイントをおいてポジションを修正する
　　c２：この助走の場合，困難なシュートの方向はない

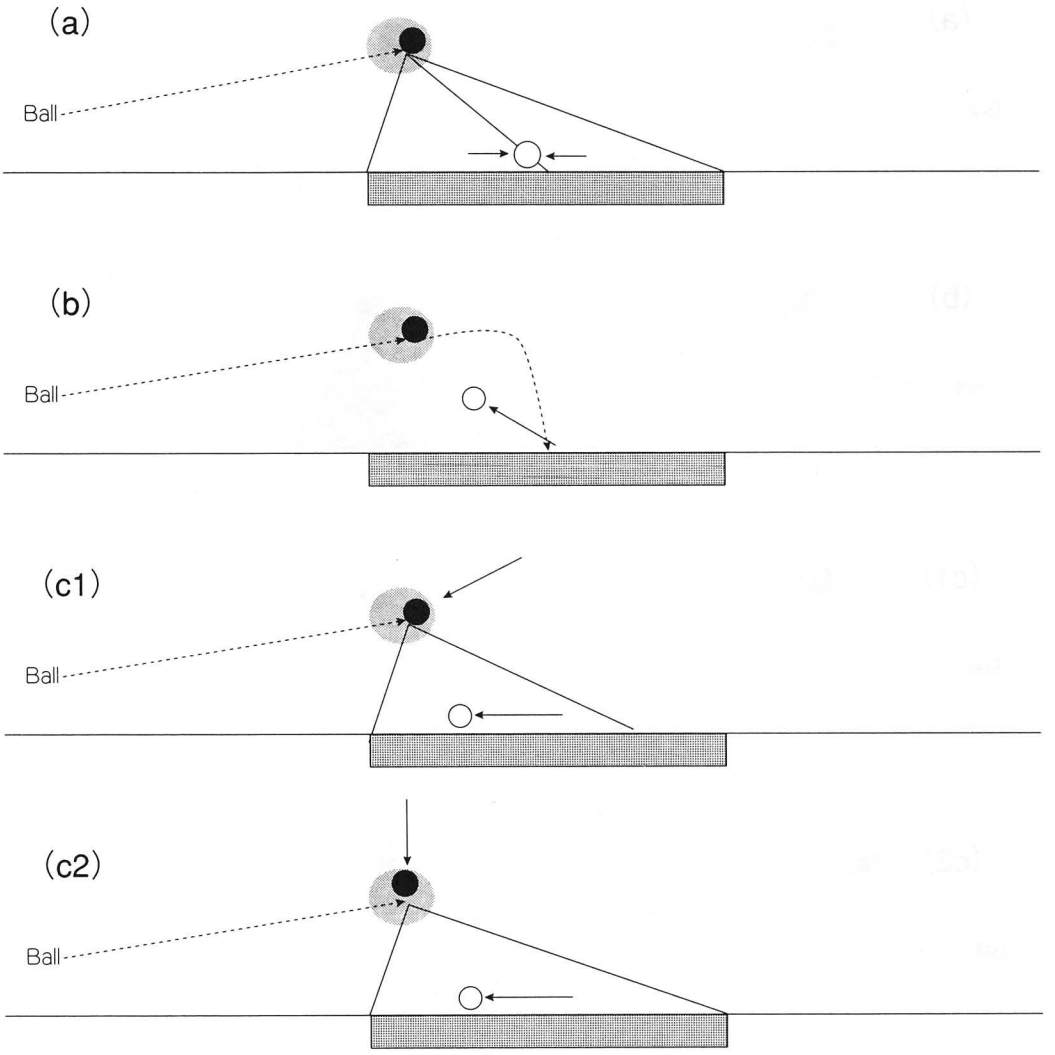


図3　ニアサイド・バックへのクロスボールに対するポジションの修正
（a）ボールとゴールの中心を結ぶ線上にポジションを修正する
（b）ポジションをとらずに前進してしまった例
　　・頭上を抜かれ易くなる
（c）c 1，c 2ともに助走角度によるシュートコースの影響は少ない

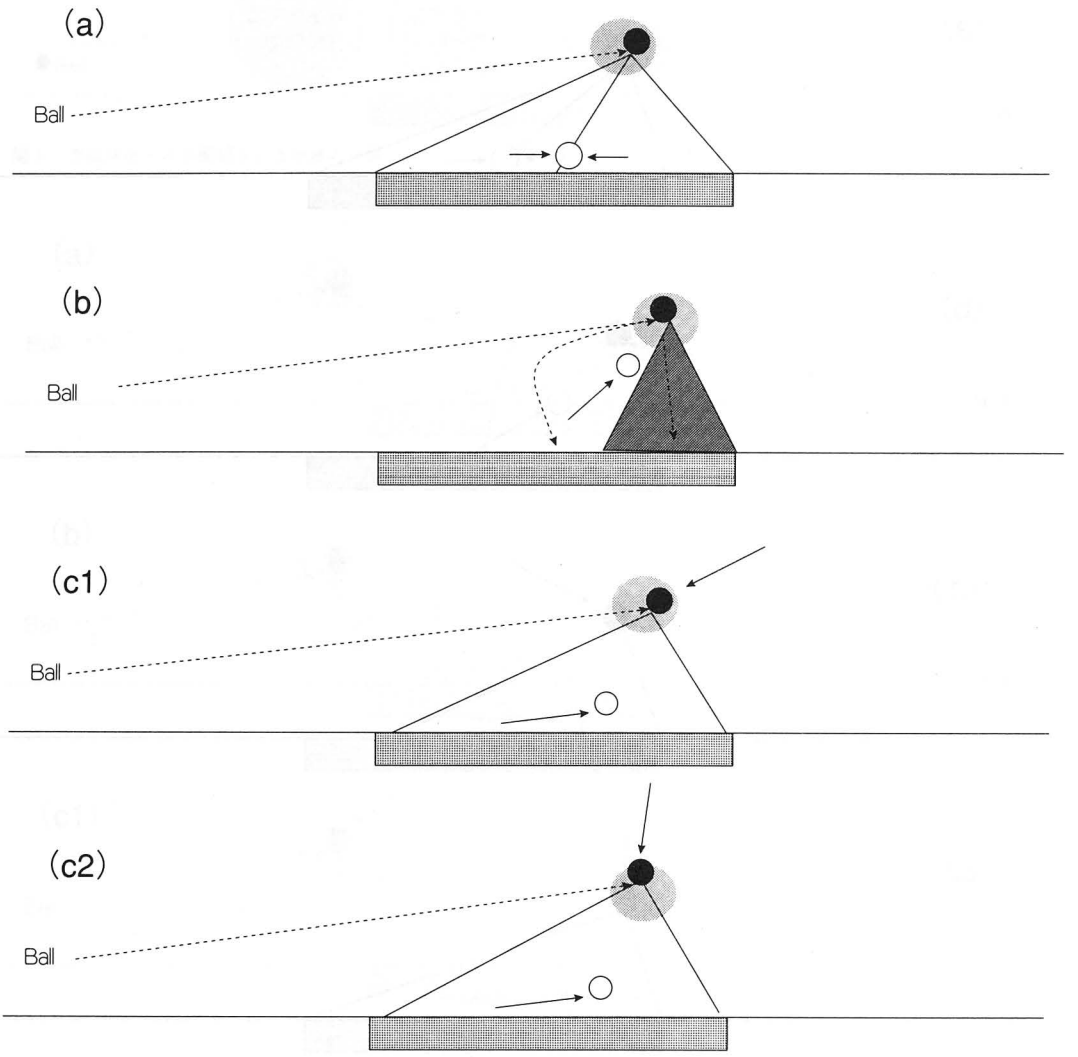


図4　フォアサイド・フロントへのクロスボールに対するポジションの修正
（a）ボールとゴールの中心を結ぶ線上にポジションを修正する
（b）ポジションをとらずに前進してしまった例
　・頭上を抜かれ易くなる
　・ニアサイド（灰色部）をカバーできなくなる
（c）助走角度によるシュートコースの影響は少ない

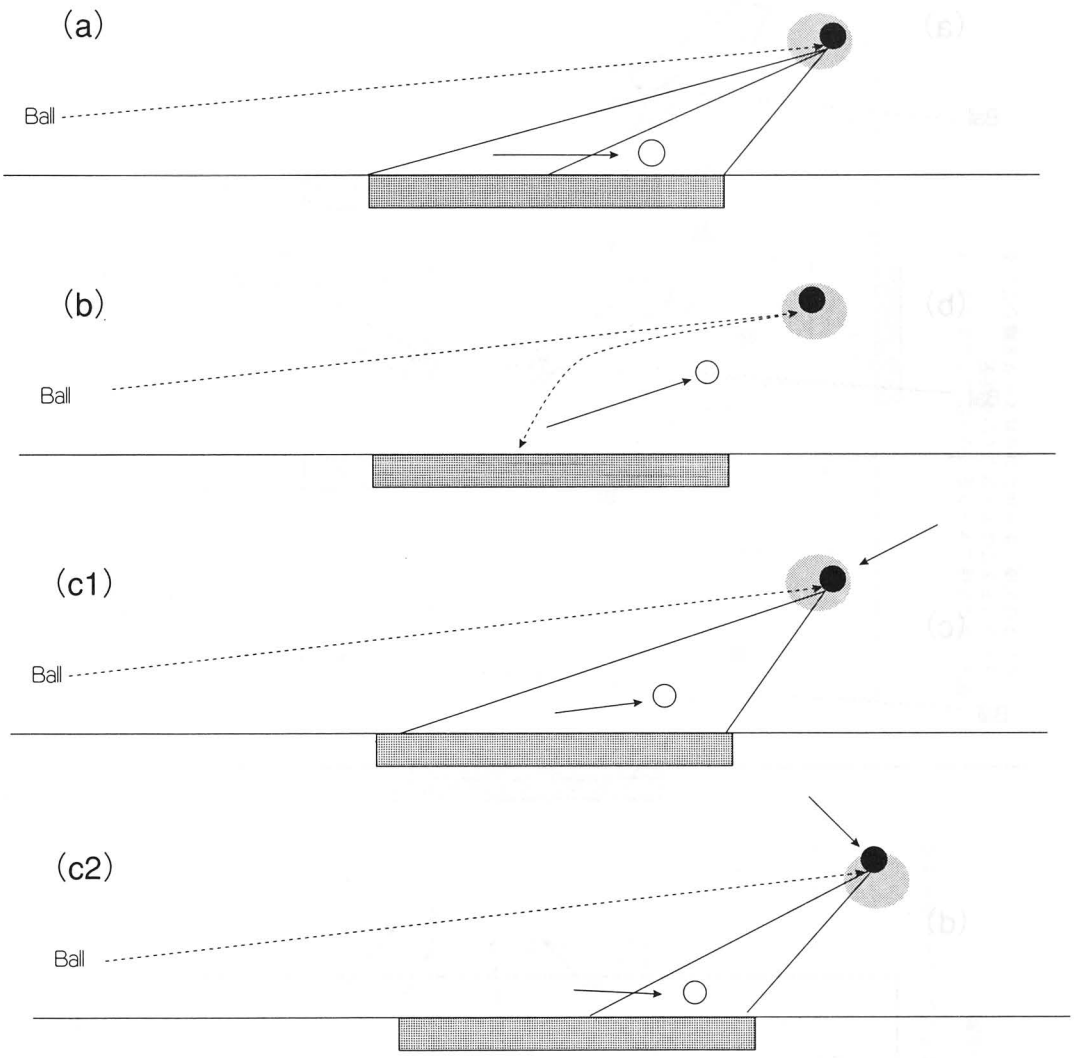


図5　フォアサイド・バックへのクロスボールに対するポジションの修正
（a）ボールとゴールの中心を結ぶ線上よりボールから見て若干ニアサイドにポジションを修正する
（b）ポジションをとらずに前進してしまった例
　・頭上を抜かれ易くなる
（c）助走角度によるシュートコースの影響
　c 1：すべてのコースにシュート可能
　c 2：シューターから見てフォアサイドにシュートすることは難しくなる

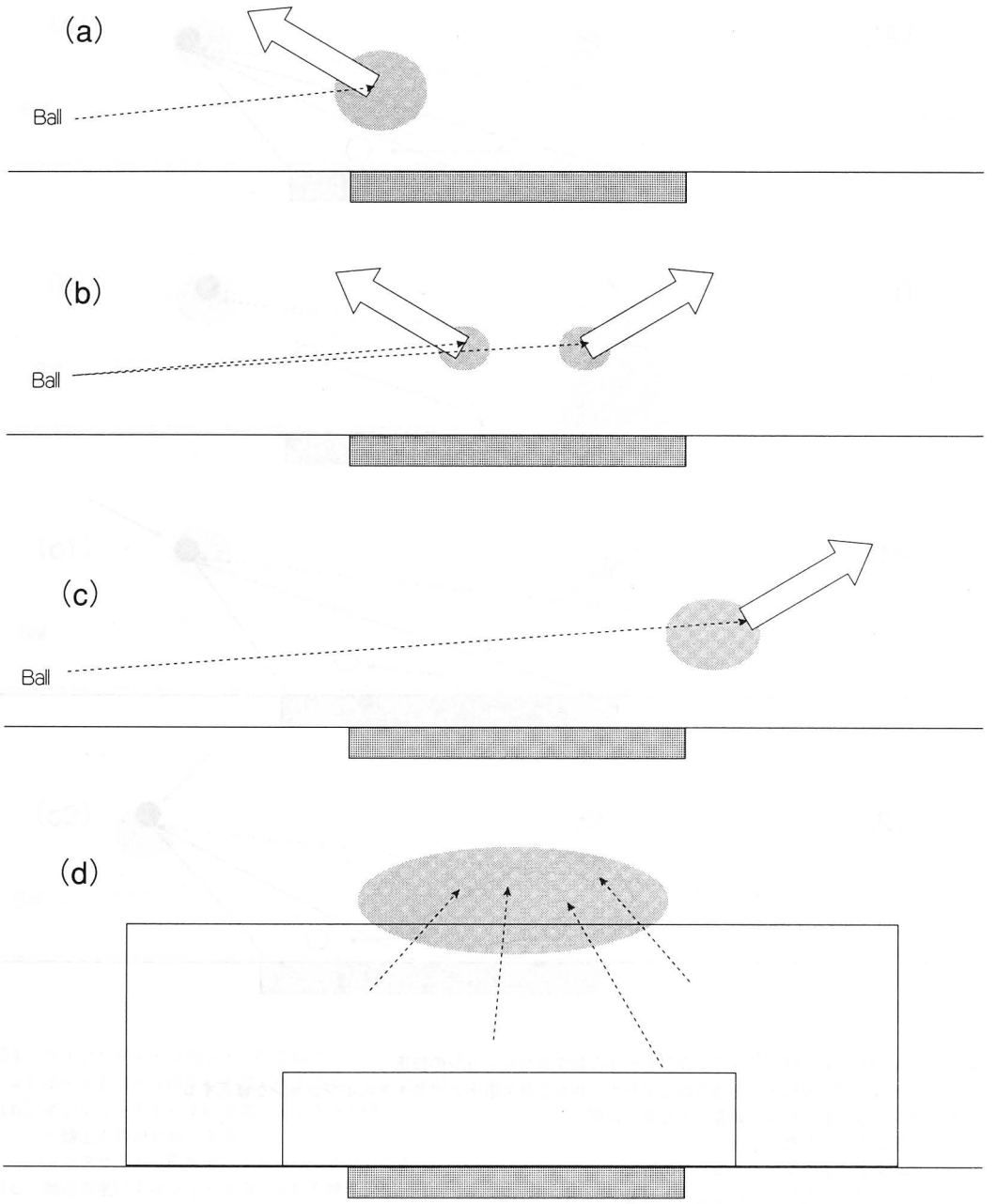


図６　理想的なクリアの方向（図中太線）とクリアが集中する地域
（ａ）ニアサイドへのボールに対するクリアの方向
（ｂ）中央へのボールに対するクリアの方向
　　・前進してクリアできる場合はボールの方向
　　・後退しながらクリアする場合はボールの方向とは逆サイド
（ｃ）フォアサイドへのボールに対するクリアの方向
（ｄ）クリアボールが集中する地域（図中灰色の範囲）

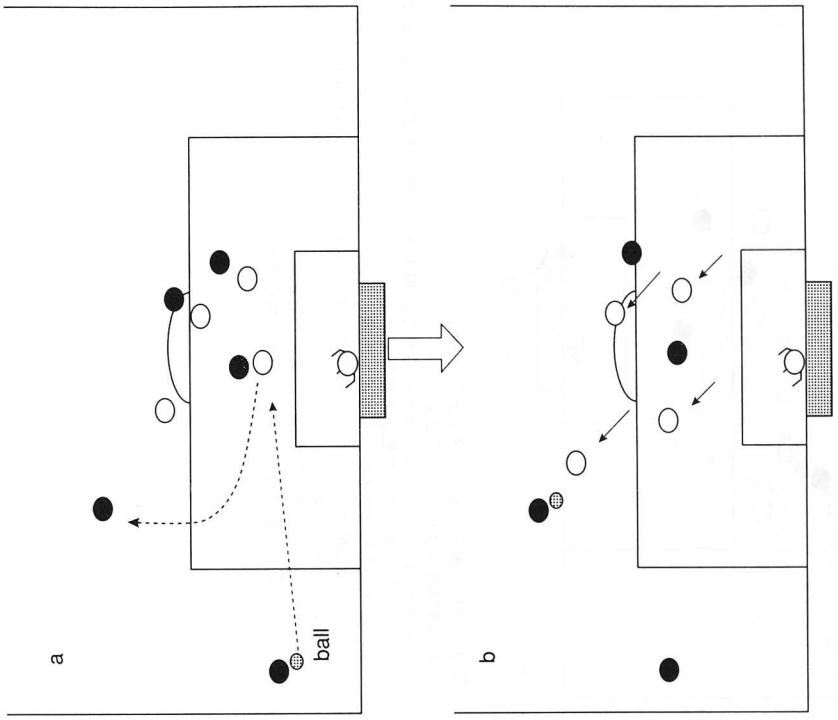


図8　クリア後にマークをフリーにしてしまうケース
（a）クリアまではマークしている状況
（b）クリア後，ボールにつられマークを離している

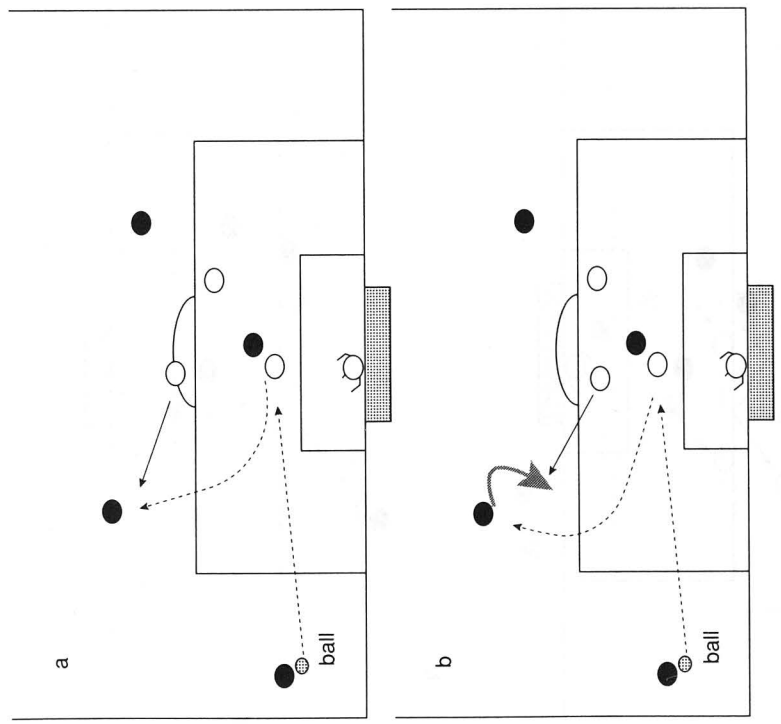
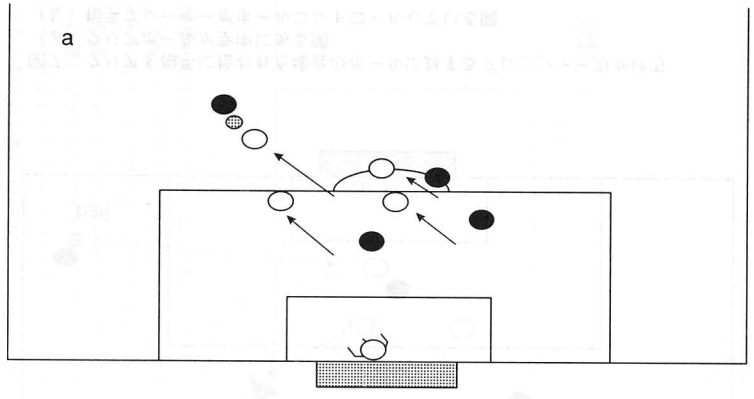
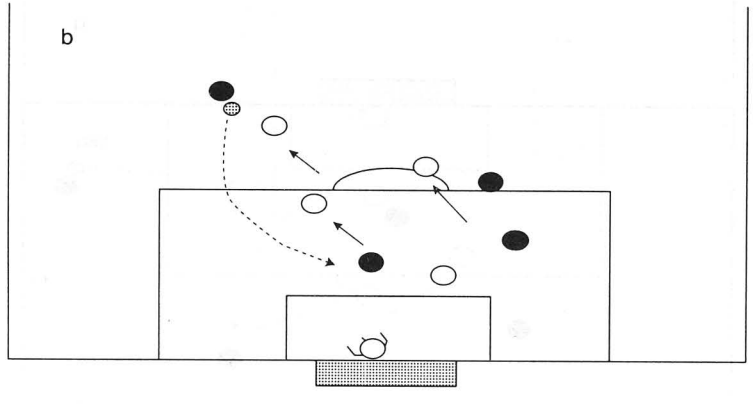


図7　クリアを相手に拾われた場合のボールに対するプレッシャーのかけ方
（a）クリアボールが空中にある間
（b）相手プレーヤーがボールコントロールしている間





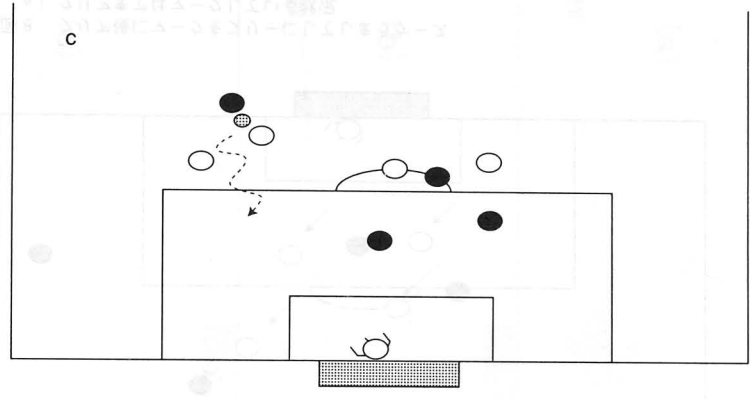


図9　クリア後のラインの押し上げ
（a）理想的なラインの押し上げ
・ボールにプレッシャーをかけながら，相手をオフサイドポジションにおくことによって，攻撃を限定している
（b）全体の意思統一を欠いたラインの押し上げ
・フリーな相手プレーヤーがオフサイドにかかることなくゴール前でボールを待っている
（c）ラインとボールとの距離が近すぎる状況
・ドリブルなどで簡単に突破される危険がある

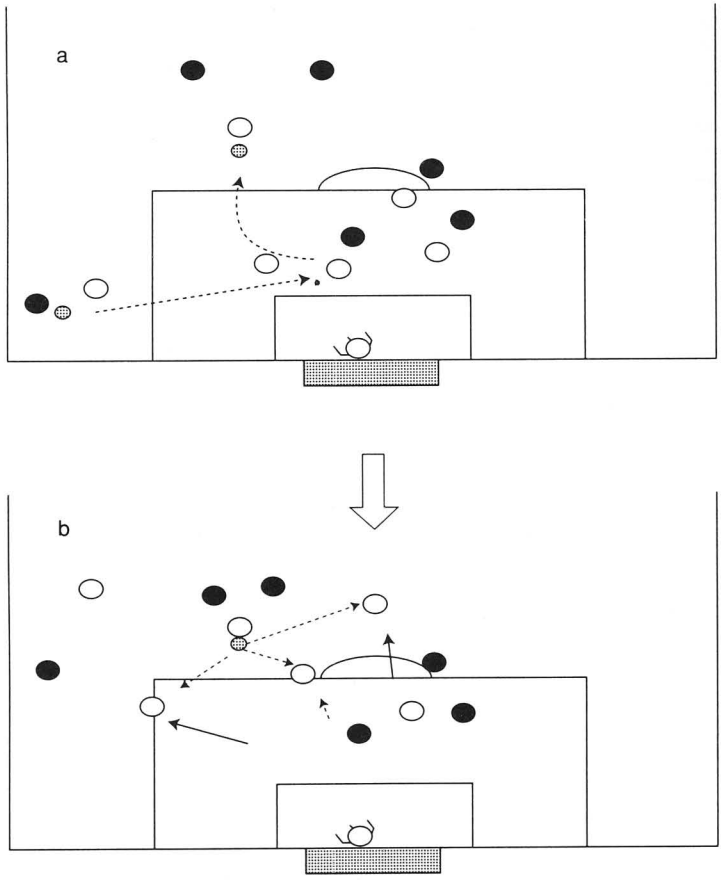


図10　クリアを味方が拾った状況でのパスコースの確保
・ボールを味方が確保したら相手のプレッシャーを受ける前にパスコースを確保する

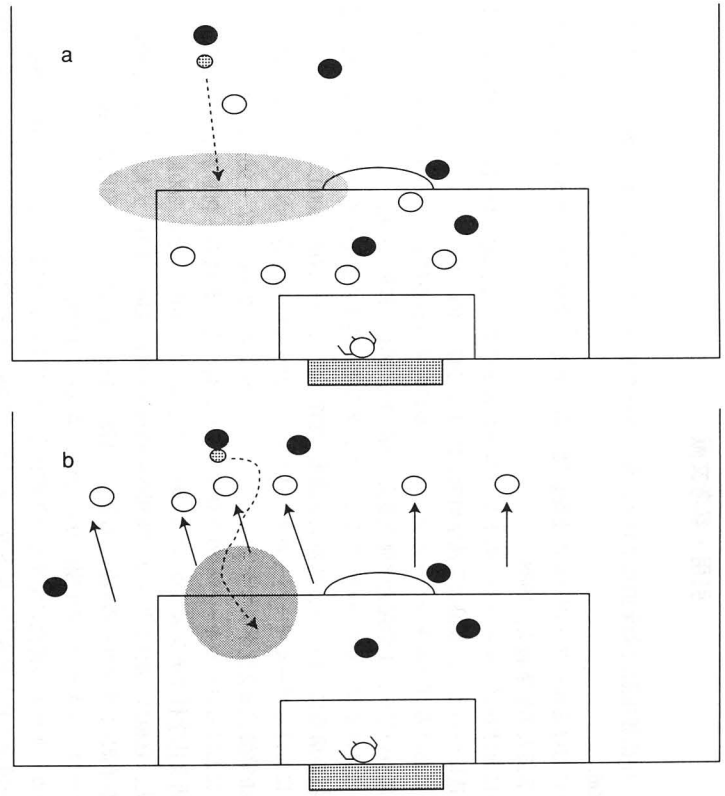


図11　クリアを味方が拾った状況での押し上げ
・パスコースを確保し，攻撃に移れるようであれば，ディフェンスラインを押し上げる
（a）押し上げがない状態
・攻撃のサポートがない
・ボールを奪われた場合，すぐに守備に移ることができない（灰色のスペースを利用される）
（b）ボールと接近し過ぎている押し上げ
・距離が近すぎるとサポートしても相手のプレッシャーを受けやすい
・ボールを奪われた場合，一気に突破される危険がある

引用・参考文献

1）フランクス，Ｉ．(中山雅雄訳)：効果的なクロス，サッカークリニック，3(4)，36－39，ベースボール・マガジン社，1996.
2）檜山康：サッカーにおけるルース・ボールの支配に関する一考察－クロスボールからのこぼれ球の支配について－，東京学芸大学卒業論文，1988.
3）檜山康：サッカーにおけるゴールキーパーのトレーニング方法に関する試案（2－1）－クロスボール処理における技術構造について－，獨協大学諸学研究，2（1)，147－95，1998.
4）檜山康：サッカーにおけるゴールキーパーのクロスボールに対する戦術構造－ゴールキーパーとディフェンダーとの関係について－，工学院大学研究論叢，38（1)，163－178，2000.
5）檜山康：サッカーにおけるゴールキーパーのトレーニング方法に関する試案－クロスボールに対するパンチングにおける技術構造について－，拓殖大学論集，237（4)，279－306，2000.
6）檜山康：サッカーにおけるゴールキーパーのクロスボールに対する戦術構造－ポジショニングについて－，獨協大学外国語学部言語文化学科マテシス・ウニウエルサリス，2（1)，67－98，2000.
7）檜山康：サッカーにおけるゴールキーパーのクロスボールに対する戦術構造－判断基準について－獨協大学外国語学部言語文化学科マテシス・ウニウエルサリス，2（2)，105－125，2001.
8）Hughes,C.（辻浅夫，京極昌三訳)：サッカー勝利への技術・戦術，136－179，大修館書店，1996.
9）Hughes,C.（鈴木泰子訳)：サッカーの戦術と技術②，178－181，日刊スポーツ出版社，1984.
10）加藤好男：サッカーゴールキーパーの技術，96－100，講談社，1992.
11）松原裕ほか：サッカーゲームの得点に関する分析的研究，日本体育学会31回大会号，202，1983.
12）(財）日本サッカー協会：ＦＩＦＡワールドカップフランス98　テクニカルレポート，45－63，(財）日本サッカー協会，1998.

（本学非常勤講師）